

知覚の概念主義の行方

古田徹也

はじめに

本稿は、知覚の哲学において「概念主義 (conceptualism)」と呼ばれる立場の可能性と限界を明らかにすることを指すものである。第1節ではまず、「知覚はどのようにして、信念を正当化ないし不当化するという仕方でこれと接続しうるのか」という、概念主義が解決しようとしている問題の本身を確認する。続く第2節では、概念主義を主導するJ・マクダウェルとA・ノエの議論のポイントを概観し、第3節では、彼らの議論が抱えている困難を指摘したうえで、日本における概念主義者の代表格であった門脇俊介がその困難をどのように克服しようとしたのかを、批判的に検討する。最後に第4節では、「(知覚が正当化をもたらすかどうかにかかわらず) そもそも信念は如何にして正当化 (不当化) されうるのか」という問題をめぐって、概念主義とは異なる方向性を素描し、門脇の議論の中にそこに繋がるものがあることを確認する。

概念主義は、英語圏の現代哲学の一つの大きな潮流を形成している。そしてこの立場の特徴として言えるのは、狭義の分析哲学の枠組みを越え、現象学や生態学、認知心理学など、多様な分野を総合して議論を形成しているということである。特に門脇の議論は、そうした分野横断的な哲学的営為のかたち、共生する哲

学のかたちの見本とも言うべきものになっている。その意味で、概念主義の困難を見定めることは、ただこの立場のみをあげつらうことではなく、他の多くの分野も同様の困難を抱えているということを見定めることでもある。信念の正当化をめぐる苦境から脱出する方法を見つけることが、どの分野においてもなお如何に難しい課題であるか——概念主義の困難は、それを如実に物語るものなのである。

1 信念の正当化をめぐる苦境

私は昨日、読みかけの本を机の上に置いて寝た。だから今も、本は机の上にあるだろう。

この、「本が机の上にある」という信念が正しいことを保証してくれるものは何だろうか。素朴に考えれば、信念を正当化するのは知覚経験であるように思われる。たとえば、「本が机の上にある」という信念の真偽は、実際に本が机の上にあることを見ることよって確かめられる、という具合である。しかし、知覚経験が外的世界についての我々の信念を裁くためには、知覚経験それ自体が真であることが保証されていない。この条件は、次の二つの条件を含蓄する。(1) 知覚経験は、「真」という真理値を持ちうる命題を内容として持たなければならぬ。すなわち、知覚経験の内容は、「机の上の本」というものでなく、「机の上の本」が真である、というのの意味を成さない。「本が机の上にある」ということ、でなければならぬ。(2) 知覚経験が事実と対応しているということが、さらに確かめられなければならない。

たとえば私が、本が机の上にあることを見ている。しかし、本当だろうか。それは錯覚や幻覚かもしれない。つまり、眼や脳に異常が生じていて、そう見えているだけなのかもしれない。誰も自分の眼と脳から逃れて世界を眺めることができない以上、知覚経験それ自体の正しさをさらに知覚によって保証するのは不可能である。そうすると、知覚経験が命題的内容を持ち、その正しさが究極的には保証されないのであれば、

知覚も信念と変わるところがないことになる。つまり、「本が机の上にあるのを見ている」ことは「本が机の上にあると信じている」ことになってしまう——こうして、いわば、信念の牢獄が形成されることになる。すなわち、我々の知覚も想像も、あるいは錯覚も幻覚もすべて、信念というカテゴリーに閉じ込められてしまふのである。

それでは、知覚を信念の牢獄から抜け出させるために、知覚が命題的内容を持つという考えを放棄すればよいのではないか。つまり、ある種の身体的対処として（あるいは、身体と環境世界との相互作用として）知覚というものを捉えればよいのではないか。実際、たとえばG・エヴァンズは、言語習得以前の幼児や他の動物も言語習得以後の人間と同様の知覚能力を有するという、ある意味では常識的な見解を受け入れている。それゆえ彼によれば、知覚を通して獲得される外界の情報自体は非概念的なもの（あるいは、未だ概念化されていないもの）であり、その情報入力から行動出力へ至るプロセスは、概念化のプロセスに対して系統発生的に先立つ、よりプリミティブなものだという（Evans 1982, 157-158, 227）。しかし、知覚をそのように動物等の他の有機体と共通の能力（世界の中のあるものを別のものと区別する能力）の発露として捉えるということは、「非常に複雑な」刺激と、（非常に複雑な）反応「図式においてそれを捉えるということ、すなわち、真と偽のコントラストという真理概念の理解を必要としないプロセスとしてそれを捉えるということである。そうすると、知覚経験それ自体は命題的内容を持たず、原理的に真であることも偽でもあることもなくなるわけだから、信念の正当化という点に関してそもそも何の関わりも持たないことになってしまふ。たとえば「本が机の上にある」という知覚は、ここでは、「太陽光線の一部が物理的な本に反射して網膜に飛び込み電氣的刺激へと変換され、その刺激が視神経を通り大脳新皮質の視覚野に達して一定のニューラル・ネットワークが興奮し、その興奮が運動野から運動神経への電氣的刺激へと繋がり、眼球や首、手足などの更なる運動を解発していく一連のプロセス」という描像において説明される。そして、こうした情報

入力から行動出力へ至るプロセスにおいては、「真」や「偽」という概念はどこにも登場しえない。すなわち、その物理的プロセス自体は真でも偽でもないのである。たとえば「視神経のこの興奮は正しい、（誤りである）」と言うのは意味を成さないだろう。それは、地球の運行それ自体について「正しい」とか「誤りである」とか言うことが意味を成さないと同様である。

ここで我々は、信念の正当化は如何にして可能かという点で、W・S・セラーズ (Sellars 1963) が「所与の神話 (myth of the given)」の崩壊として描き取った、抜き差しならないディレンマに立たされている。たとえば「本が机の上にある」という信念が形成される源泉として机の上の本の知覚という所与——表象、印象、センス・データ (感覚与件)、クオリア、等々——を想定したとしても、その所与が命題のかたちで表現できるような内容を持たないとすれば、そもそも「本が机の上にある」という信念を正当化することは不可能であり、また他方、その所与が命題的内容を持つ (すなわち、真偽の値を持ちうる) とすれば、それ自体が正当化を必要とすることになってしまう。この苦境を、たとえばD・デイヴィドソンは次のように簡潔に言い表している。

感覚が単なる原因なら、それは結果としての信念を正当化せず、また他方、感覚が何らかの情報をもたらずなら、その情報は嘘である可能性がある。(Davidson 2001a, 14; 邦訳、二二九)

信念の正当化 (あるいは不当化) が如何にしてなされるのかを見出すという課題は、極めて重要である。というのも、それが見出されないということは、言い換えるなら、信念を正当化する事実、すなわち、真であること、を我々が見出せない、ということであるからである。そうすると、「信じていること」と「事実成り立っていること」との対比というものが実行不可能となるのだから、信念および真理という概念の実質そ

のものが見失われることになってしまうのである。

それでは、信念の正当化をめぐるこのデレンマから脱出する道は如何にしてありうるのだろうか。

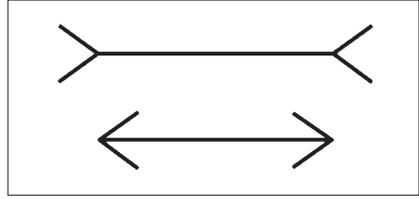
2 概念主義の戦略

2.1 信念と概念の分離

信念の正当化と知覚の関わりについて、現在ひとつの有力な見解を提示しているのが、マクダウェルやノエらの「概念主義」と呼ばれる立場である。概念主義者は、カントの有名な「内容なき思考は空虚であり、概念なき直観は盲目である」というモットーを導きにして、経験内容は感覚の受容性と概念的な能力という能動性が協同して働くことによって成立する (McDowell 1994, 9-10)、と主張する。別の言い方をすれば、「我々が世界に対して持つ知覚的關係は、世界が我々の受容能力に及ぼす刺激に至るまで、徹頭徹尾、概念的である」 (McDowell 2009c, 308; 邦訳、六三) ということになる。

重要なのは、概念主義者はこのように「成熟した人間の知覚は常にすでに概念的である」と主張することによって「成熟した人間の知覚は常にすでにそれ自体が信念である」と主張しているわけではない、ということである。彼らによれば、知覚経験を持つことは信念を持つことと同じではないが、しかし概念的なものではある。つまり彼らは、信念と概念とを切り離すのである。マクダウェルはたとえば次のように述べている。「Pを見ることは、視覚的な仕方ですべてPという信念を得ることと同じではない。たとえば、Pを見た人は通常はまさにPという信念を得るといえるのは疑いないとしても」 (McDowell 2009b, 158)。

概念主義者が信念と概念とを切り離し、知覚経験は概念的なものだが信念を持つことと同じではない、とするのは、「かくかくのように見えるが、本当はしかじかである」と信じる (判断すること) が可能だ、あ



るいは、「かくかくのように見えるが、本当は分らない」と判断を差し控えることが可能だ、と彼らは考えるからである。ミュラー・リエルの錯視図を例にとってみよう。上の図の二つの線は、長さが同じだと知っていてもなお、上の線の方が長く見えるだろう。逆に言えば、二つの線は違う長さに見えるが、そうとは信じない（そう判断しない）、ということが可能なのである。この点を強く指摘したのはエヴァンズであり、彼はこのことから、知覚は信念独立的であると主張する (Evans 1982, 123-4)。マクダウェルもノエも、基本的にエヴァンズのこの主張を受け入れるが、知覚が信念と無関係であるということまでは認めない。すなわち、「一人に事物がどう見えるのかは、人が事物のあり方についてどう判断すべきかということと、少なくとも関連は持ち続ける」⁽¹⁾ (Noz 2004, 188; 邦訳、三〇八)と彼らは主張するのである。つまり、この錯視図の知覚のような極めて例

外的で作為的な場面は別としても、日常的な場面においては、「Pを見るという知覚経験を持つことは、Pという信念を持つ十分な理由を提供する」という意味で、知覚経験は信念に対して理由構成的な関係にあるということである。ノエは次のように述べている。「知覚経験の内容が概念的であるというのは、その内容が判断されることではなく、判断されることでありうる、という意味においてなのである」(188; 三〇八)。また、マクダウェルも同様のことを、「経験を持つことは、信念に対する合理的な権利付与 (rational entitlement) を構成する」(McDowell 2009d, 132) という言い方で表している。

以上のように、概念主義者によれば、特定の知覚経験は特定の信念を持つこととは独立だが、その信念を持つことに対して理由構成的な関係にある（合理的な権利付与をもたらず関係にある）という意味で、その信念を持つことと無関係ではない。言い換えれば、成熟した人間における知覚経験は、理由構成関係という推論的な連関の全体——所謂「理由の空間 (space of reasons)」——の圏内にあるという意味ですでに概念的

なものであり、そのことよって知覚と信念との繋がりが確保される、というわけである。

こうした彼らの議論は、まず、経験は概念よりもきめ、細やかである（経験は我々の概念的すなわち言語的なリソースを凌駕している）という常識的見解と衝突するように見える。たとえば窓の外にある木の葉は、幾重にも重なり合いながら日差しを透かし、果てしないほどの微妙な色合いを見せるが、我々はそれらすべてを指示する色彩語を持つてはいない。エヴァンズ (Evans 1982, 229) や R・ヘック (Heck 2000, 489-90) は、こうした事実は経験が概念よりもきめ細やかであることを示しているとして、経験は非概念的なものであると結論付ける。

しかし概念主義は、「信念を持つこと（判断すること）」と「概念的能力が働いていること」を同一視しないため、両者を同一視するエヴァンズやヘックの主張は概念主義批判として妥当するものではない。たとえば、木の葉の微妙な色合いを見て「これはちよつと暗い黄緑色だ」と判断したとしよう。エヴァンズやヘックにとつては、その判断の中の「ちよつと暗い黄緑色」という言葉はそのとき一回きりの色彩印象を指示するものであるため、所謂「一般性制約」（概念は様々な信念内容をまたいで繰り返し用いられるのでなければならぬ、という制約）に抵触し、したがって概念とは呼べないものである。それに対して概念主義者は、「ある能力を持つこと」と「その能力が発現していること」とをエヴァンズやヘックは混同していると主張する。概念的能力が働いていることとは、「これはちよつと暗い黄緑色だ」と具体的な場面で判断することそれ自体ではなく、どのような色合いについても「これはちよつと暗い黄緑色だ」「これは驚色と黄緑色の中間だ」「これはかなり濃い黄緑色だ」といった無数の判断をすることができるといふことにおいて示されるものだと考えるのである。つまり、概念主義者は色彩概念というものを、エヴァンズらのように実体的なものとして、すなわち、人々が判断において実際に数多く用いてきた具体的な色彩語（赤色、黄緑色、群青色、等々）の集合としては捉えないのである。たとえばノエは、「知覚内容は概念的なものであるとい

う主張は、我々が知覚にまつわる語彙目録に暗黙的に通曉している、というような主張なのではない……
〔知覚経験の概念性は〕我々がすべてのものの名前を実際に知っている、ということに存する必要はない」
(Noe 2004, 191; 邦訳、三二一)と強調している。

ノエは、色彩概念をむしろ数概念との類比において捉えるように提案している (Noe & 三一九〜二二三)。
我々はすべての数を数え上げることはできないが、どのような任意の数も書き出すことができる。数概念を理解しているとは、まさしくそのような能力を持つことに他ならない。それと同様に我々は、無限に多様な色彩に対応する無限の色彩語をあらかじめ持っているわけではないが、どのような任意の色彩も言葉によって表現することができるのであり、そのことがまさに色彩概念を理解していることだとノエは指摘するのである。

2.2 感覚運動的技能としての知覚——大森莊蔵の「立ち現れ一元論」との相違

ノエによれば、知覚経験のきめ細やかさを強調する議論は、たとえば視覚経験を一種のスナップショット(どの部分も細部まで一様に映し出された画像)のように見なす旧来の視覚モデルに依拠したものである。ノエは、M・メルロ・ポンティの現象学やJ・J・ギブソンの生態学、あるいはU・ナイサーの認知心理学の知見なども幅広く取り入れながら、このスナップショット・モデル自体に根本的な錯誤があると主張し、知覚経験とはその本質からして不確定なものであることを強調する (Noe 2004, 134; 邦訳、二二七)。我々がたとえばトマトを見るとき、そのすべての面を同時に見ることは原理的にできない。我々は、三次元の世界に住まい、特定の視点から世界を眺める以外にないのであるから、眼前に広がる光景は、常に隠れた部分が存在する不確定なものである。トマトの側面や背面を見ようとすれば、我々は自分の身体を動かすか、身体を使ってトマト自体を動かす必要がある。逆に言えば、そのように感覚と身体運動とが相互に絶えず絡み合っ

ているからこそ、我々はトマトを平板な絵としてではなく、まさに立体として経験できるのである。それゆえノエは、「立方体の三次元的な現前を我々にもたらすような理解とは、ある種の感覚運動的 (sensorimotor) な理解である」(207:三三九)と述べる。つまり彼によれば、「我々が感覚運動的な知を持っている」ということは、観察されるものとしての立方体という概念を持つていることの基礎なのである」(同)。

事情は、立体だけでなく、二次元の画像であっても同様である。群衆が写された写真の中から友人の顔を見つけ出そうとするとき、我々は眼球を動かし、様々な顔に焦点を合わせる作業を続けることによって目的を達する。つまり、眼前に広がる光景の奥行きや細部というものは、感覚と身体運動との相互依存的な技能——感覚運動的的技能——を行使する者にとってはじめて現出するものなのであり、一挙に奥行きや細部が経験されるわけではないのである。

ノエによれば、スナップショット・モデルの誤りは、認知心理学における「非注意による見落とし (inattention blindness)」や「変化の見落とし (change blindness)」をめぐる数々の実験が如実に証し立てている (95-93:七五〜八二)。たとえば、ビデオでバスケットボールの試合を見て、パスの回数を数えるように言われた被験者のほとんどは、傘を差した女性やゴリラの着ぐるみを着た人がコートを横切っても、そのことに全く気付かない。傘を差した女性やゴリラは被験者の網膜像には映っていたはずであるから、視覚経験をスナップショットのように見なすモデルでは、こうした「非注意による見落とし」や「変化の見落とし」を説明できないのである。この実験を行ったナイサーは、「注意とは知覚そのものである」(Neisser 1976: 85; 邦訳 九一)と結論付けている。すなわち、身体や眼球を動かしてパスの回数やゴリラ等に注意を向ける行為自体がまさに知覚経験なのであって、注意することにおいて我々は、「スナップショット的に映し出された表象 (心的表象) に対してさらに注意を向ける」という二つの段階を踏んでいるわけではないということである。ノエもこの見方を踏襲する。繰り返すように、細密な世界は表象として一挙に与えられるのではなく、感覚

運動的技能を行使することによって細部に注意を向けるという行為においてのみ現前すると、彼は主張するのである。すなわち、「世界の詳細が現前しているという私の感覚は、自分の身体を動かし注意をシフトしていくことによって世界の詳細にアクセスすることができるという、私の能力に基礎を置いている。世界はいま私に現前しているが、それは表象されたものとしてではなく、アクセス可能なものとしてなのである」(No. 2004, 192; 邦訳 三三四)。

この論点は、伝統的な物心二元論を超克するための一つの視座を提供している。それは知覚経験を、世界内に実在する様々な対象の心的表象としてではなく、諸対象のいわば直接的な把握として説得的に描き出そうとする試みに他ならない。この試みは、生態学によって開拓されてきたアプローチ、すなわち、「対象や事象は主観の構成物や表象などではなく、環境中にそのままに実在しているものである」(河野二〇〇三、二九)という直接知覚論ないし直接実在論の延長線上にある。河野哲也は生態学的アプローチの要となる主張を次のようにまとめている。「知覚は表象を所有することではなく、環境に注意を向ける行為である。過去経験が現在の知覚に貢献しているとすれば、それは、過去における学習が知覚という行為を熟達させたからである」(六三)。同様のポイントを、ノエは次のように表現している。「我々は感覚運動的な知覚を、経験に対して適用する (*apply to*) のではなく、経験において (*in*) 発揮するのである」(No. 2004, 194; 邦訳、三二六〜七)。

この生態学的一元論は、直接知覚論(直接実在論)のもう一つの形態である大森荘蔵の所謂「立ち現れ一元論」とある程度共通性を持っている。すなわち、知覚とは「無垢の素材のようなもの(感覚印象、センス・データ、等々)がまず与えられて、それをさらに加工する」というような二段階の工程なのではないという点を強調する点では、両者は同じである。しかし、決定的な違いがある。大森の場合、眼を向けるといった身体運動と「見えている」こととは厳然と区別される。そして、身体の各部位を動かすことによっ

て刻々と移り行く視覚風景が今この視覚風景に籠められるということが、立体の三次元的な現前を我々にもたらすと説明される(大森一九九九、四八〜五二)。しかしこの説明では、籠められる視覚風景が時間的空間的に際限が無くするため、「結局、視覚風景とは常に四次元の全宇宙世界の風景であると言わねばならない」(六四)。

一方、ノエが採用する生態学的一元論の場合は、そうした「今この視覚風景は常に四次元的な全宇宙の風景である」という法外な描像に帰着することはない。なぜなら、この一元論では身体運動と「見えている」ことを区別しないため、「今ここで見えている視覚風景に、それと連続する視覚風景が籠められる」という契機を必要としないからである。つまり、この一元論において「知覚」と呼ばれるものは、身体運動によって世界の細部にアクセスしていく、連の過程、世界と身体とのフィードバック・サイクル(循環システム)として特徴付けられるのである。

3 概念主義が抱える困難

3.1 「原概念」から「概念」への壁

以上のように概念主義は、信念と概念とを切り離し、特定の知覚経験を得ることは特定の信念を持つことと同じではないが、その信念を持つことに対して理由構成的な関係にある(合理的な権利付与をもたらす関係にある)という意味で、常にすでに概念的なものである、と主張する。そして、経験は概念よりもきめ細やかである(経験は我々の概念的すなわち言語的なリソースを凌駕している)という批判に対しては、(1)概念的能力とは「知覚経験のきめ細やかさに対応する色彩語等の膨大な語彙を実際に所有している」ということではなく、「任意の色彩や形象を表現することができる」ということであること、(2)「経験のきめ

細やかさ」という観念が依拠するスナップショット・モデルは視覚のモデルとして根本的に誤っており、経験とは本質的に不確定なものであること、以上の二点によって反論している。ノエは次のように強調する。我々はある形態について、そのすべてのアスペクト（面、相）の名前を持っているわけではないが、アスペクトが変化していく仕方を掌握している。だからこそ、形態の経験というものはありうるのだ、と（Noë 2004, 198; 邦訳、三二四）。

概念主義に対するより根本的な批判は、知覚における身体的対処や技能的習熟という側面を重視するH・L・ドレイファスによって為されている。すなわち、「知覚は『どう』でも（all the way out）」概念的であるというマクダウェルのセラーズの主張を受け入れ、それによって、言語習得以前の幼児や高等動物と我々が共有していると思われる基本的な種類の知覚能力を否定することが、我々にはできるだろうか（Devil's 2006, 43; 邦訳、三六）という批判である。ドレイファスによればマクダウェルらは、「所与の神話」を避けようとするあまりに、経験主義の対極にある先知主義へと舵を切りすぎている。概念主義は、身体的対処も含めたあらゆる認識や行為に心的作用があまねく行きわたっているでなければならぬという別の神話、すなわち「心的作用の神話」を提示するものだ、とこうのである（sec.III）。

ドレイファスのこの批判は、「人間は基本的な知覚能力を他の動物と共有している」という常識的な見解と合致するため、一定の説得力を持っている。しかし、知覚経験の非概念性を主張するエヴァンズの議論に関してすでに述べたように（第1節）、知覚経験が命題のかたちで表現できるような内容を持たないとするなら、それが如何にして信念と結びつきそれを正当化ないし不当化できるのが全くの謎となってしまう。「成熟した人間の知覚経験は常にすでに概念的である」という概念主義の主張は、知覚経験が非概念的であるならそれが信念を正当化することは端的に不可能なのだから、言語習得以後の人間の知覚経験はそもそも概念的であらねばならない、という、いわば論理的な次元の主張なのであり、マクダウェルはそれ以上の具

体的な議論を行おうとはしていないように見える。^③ というより、むしろ、具体的に知覚と信念とがどのように接続されるのかについて語り出さないことよって、概念主義という立場は維持されると言える。しかし、この次元の主張に留まっていたのでは、概念主義をめぐる論争は中身を持たない水掛け論にひたすら終始することになるだろう。

もともと、概念主義者の中でもノエは、ここまで見てきたように、論理的な次元の主張から踏み出し、我々の知覚経験が具体的にどのように成立しているかについて積極的な主張を行ってはいない。しかしノエの議論は、人間が概念の萌芽的な形態、すなわち原概念 (*proto-concept*) を持っていることの内幕の説明とはなっていない、それ以上ではない。彼自身、「私の提案は、感覚運動的技能がそれ自身、概念的ないし、『概念的』な技能だということである」(Noë 2004, 183; 邦訳、二九九※強調は引用者) と述べ、「原概念」という術語の典故として当該のH・パトナムの議論 (Putnam 1992, chap. 2) (Putnam 1999, 159-62; 邦訳、一三四〜六) を挙げている。しかし、そこでパトナムが実際に行っているのは、概念と原概念とを厳然と区別するという作業に他ならない。彼が「原概念」という術語を案出したのは、「原概念の所有とは、概念を持つための前提条件となる能力の一つを表すものではなく、概念と決して同一視されるべきものではない」という点を強調するためなのである。たとえば、犬が肉をそれ以外の物から区別して行動することができるのであれば、その犬は肉に関する原概念を持っていると言うことはできる。しかし、肉の概念を持っているとまでは言えない。なぜなら、犬がたとえベジタリアン用の肉の代用食品を食べてしまったとしても、必ずしも「犬はその食品を間違って肉と信じていた」という風に信念を帰属させる必要はなく、「犬は、通常は偽物であることがまぎらないような、『肉』と呼ぶところの物体に特有の刺激に、(非常に高度で複雑な情報処理機構を介して) 反応したのだ」と言うこともできるからである。

なるほど、感覚運動的技能という身体的対処によって知覚経験を特徴付けていくノエの議論は、知覚のき

め細やかさという直観を保持し知覚に関してスナップショット的な直観を持つような論者（「非注意による見落とし」や「変化の見落とし」の実験を意外と受けとめる論者）に対してはインパクトを持つだろう。しかし、概念主義が回答を与えるべき目下の課題、すなわち、「知覚がどのようなようにして、信念を正当化（不当化）するという仕方でこれと接続しうるのかを明らかにする」という課題に寄与するものではない。その意味で、ノエの議論はドレイファスの批判への反論となるどころか、信念の正当化の可能性に関してむしろドレイファスと同じ困難を抱えていると言えるのである。^①

3・2 門脇俊介の概念主義とその限界

門脇俊介は、マクダウェルやノエの解釈主義の方向を受け継ぎつつ、この課題に答える方途を追求している。それは、「知覚から信念システムへの連続的な表象のあいだでの理由づけというよりは、不確定で非命題的である知覚の志向性が、確定的な命題へと完成される関係として、知覚と信念システムとの関係を考え直すという進み方」（門脇二〇〇四、一〇〇）である。門脇はその「進み方」の具体的な有り様について、次のように続けている。

知覚の志向性が、命題から成り立っている推論的な信念システムに、世界からの制約を与えることができるのは、前者にすでに含まれているものを、命題や推論が完成しているからにはかならない。「ここにペンがある」という文（あるいは対応する信念）が正しいのは、ここにペンがあることについて経験の内的像があるからでも、客観的世界からここにペンがあるという情報が送り込まれてくるからでもなく、私が目の中のペンについて、さまざまな適切なふるまいをなすことができることに基づいている。「ペンを取って」と依頼されればペンを移動させることができるし、赤いペンについて「赤いものにさわるな」と

命令されれば手を引つ込め、ペンをすぐさま見分けて署名をすることもできる。こうした適切なふるまいができることが、本物の知覚経験であり、不確定で非命題的な志向性が世界へ向かう行動の方向づけを形成しているという意味での、知覚の志向性である。

別の言葉で言い換えるなら、ペンについての命題や推論は、命題や推論以前に含蓄されたふるまえることの可能性、知覚することができるとするから、知覚によって正しいとされることになる。……表現とは、命題的・推論的に未確定ではあつたがすでに「技能」の形で含まれているものを、明示的に確定してやるということなのである。(一〇〇〜一)

つまり門脇によれば、たとえば目の前のペンの知覚とは、そのペンにまつわる様々なまいができるという「技能」に他ならない。そして、技能という不確定で非命題的な志向性がすでに含んでいるものが命題とどうかたちで表現され、明示的に確定されるということが、知覚と信念の結びつきの内実である、というのである。

知覚が非命題的な「技能」としての志向性であるということは、言い換えるなら、「知覚は哲学者たちが想定しているような意味では『として』という仕方でも概念化され、明示的に命題化されているわけではない」(門脇二〇〇七b、二〇八〜九)ということである。ここで門脇が念頭に置いているのは、N・R・ハンソンやT・クーンらによる、L・ワイトゲンシュタインの「アスペクト知覚」をめぐる議論に対しての誤解だろう。よく知られているように、ワイトゲンシュタインは『哲学探究』第二部等において、アヒルの絵だと思っていた図がウサギの絵としても見ることに気付くといった現象に注目し、様々な角度から議論を行っている。ハンソンはその議論にヒントを得て、「見ることは『理論負荷的』な試み」(Hanson 1958: 19; 邦訳、四一)であるという主張、すなわち、「見るということには『言語的』な要素が入っている」

(95、五六) という主張を展開する。(そしてこの主張が、クーンらのいわゆる「パラダイム論」へと受け継がれていったのは周知の通りである。) ハンソンはこの「観察の理論負荷性」テーゼを提出する際、その主要な論点のほぼすべてに関してワイトゲンシュタインの議論への参照を求めているが、しかし、当のワイトゲンシュタイン自身は、「…として見る」というあり方を知覚の恒常的な様態と見なしてはいない⁵⁾ (Wittgenstein 1953, II_195; 邦訳、三八七～八)。

ワイトゲンシュタインが「…として見る」ことの恒常性を否定するポイントは、先の門脇の議論と共通したものである。すなわち、あるものを様々な仕方で取り扱う特定の技能を有しているということが、そのものを「…として見る」ための必要条件を構成している、ということである。ワイトゲンシュタインは次のように述べている。

図形のある種の適用がすらすらとできる者についてのみ、彼はいまそれをこう、いまはこう見ている、とひとは言うだろう。こうした体験の根底にあるのは、ひとつの技術に通暁しているということなのである。(II_208; 四一五)

しかし、このポイント自体は、知覚が概念的なものであることを否定するエヴァンズやヘックも同意するものだろう。またワイトゲンシュタインも、門脇ら概念主義者とは異なり、知覚経験が概念的であると主張しているわけではない。(そして、概念的でない主張しているわけではない。) つまり、問題の核心はこの先にある。

門脇は、知覚と信念の結びつきを、「不確定(未確定)ではあるがすでに技能の形で含まれているものが、命題というかたちで表現され、明示的に確定される過程」として説明する。しかし、その過程が具体

的にどのように実現されるのか、そして、知覚はその過程によってなぜ信念を正当化できるのかについては、説明を与えていない。たとえば彼は、「不確定性を本質とするわれわれの知覚経験は、特別な注意や命題化がなされていない、知覚の意味の不確定な状態——これを非焦点化状態と呼ぼう——から、注意や命題化によって意味の特定の相が際立っていく焦点化状態のあいだの、どこかに位置している」（門脇二〇〇七b、二〇九）と述べる。また、「知覚経験とそれに連結する概念的思考」（二一〇）、「意識的な知覚経験と思考・判断に属する概念が潜在的な経験との有意味な関連を有している」（二一一）等々、知覚と信念の結びつきを様々な仕方で表現しようと試みている（※上記引用文中の強調はいずれも引用者）。しかし、「連結」や「有意味な関連」というものを如何に強調するとしても、それ自体が具体的にどういうものであり、どのようにして可能であるかを説明できない限りは、「知覚と信念は、前者が後者を正当化するという仕方で結びつく」ということの論拠とはなりえない。

そもそも、門脇の言う「知覚経験には、命題として表現されるものがすでに含まれている」とは実のところどういうことなのだろうか。「すでに含まれている」のなら、知覚はやはりそれ自体信念であるということになるのではないか。この点について門脇の議論には、一元論的見地から後退していると受け取られかねない揺れが見られる。たとえば以下で門脇は、知覚経験が一種の信念であるという主張を行ってしまった。

ここで私が知覚的理解を「不確定の信念」と呼ぶのは、それが命題的信念のような仕方で概念化されていないということではなく、知覚的狀況の一定の局面に限定されながらも、さまざまなアスペクト——このセクター、セクターと背景のかかわり、赤いもの——を表現可能なものとして、内包するからである。こうした「不確定の信念」がより確定した命題的なものによって表現されるだけでなく、確定し

た命題的なものを正当化することに不思議はない。⁽⁶⁾ (門脇二〇〇七a、一八二※強調は引用者)

この箇所の門脇の議論は、やはり苦しいと言わざるをえない。不確定の信念がどうやって確定的な信念を正当化することができるのか。非焦点的な信念が、どうやって焦点的な信念をすでに内包することができるのだろうか。そして何よりも、それが信念であるならば、それはさらなる正当化を別に必要とすることになってしまうのである。概念と信念とを切り離す概念主義の基本的な戦略から離れ、知覚的理解を信念を持つことと同一視してしまえば、待っているのはまたも、信念の牢獄に他ならない。

4 コミュニケーションという次元へ——門脇の議論が孕む可能性

以上のように、結局のところ概念主義は、信念の正当化ないし不当化は如何にして可能かという問題に答えることに失敗している。すなわち、信念および真理の概念を必要としない技能として知覚経験の特徴付けるか、あるいは、知覚経験を再び信念の牢獄に閉じ込めるか、そのどちらかに帰着しているのである。信念および真理の概念に内実を与えるためには、知覚によって信念の正当化(不当化)という契機をもたらそうとする概念主義とはそもそも別の戦略が必要であろう。

ワイトゲンシュタインは、所謂「私的言語批判」を展開する一連の議論において、自分自身によつては「…であること」と「…であると信じていること」とを区別することはできないということ、すなわち、実在と信念とのコントラストは他者とのコミュニケーションという次元において初めて可能になるということを、強く示唆している (Wittgenstein 1953, I 258-65)。また、このポイントをデイヴィッドソンは「三角測量」の比喩を用いてパラフレーズし、「二人以上の人間が、自分たちの相互作用と自分たちが共有する世界との相

相互作用を同時に行う」という指示連関の三角形が形成されることが、信念および真理の概念がもたらされる可能性の条件を構成する、という議論を繰り返している (Davidson 2001b; 2001c; etc.)。

実は門脇も、このポイントに接近している。彼はある箇所で、命題知 (Knowing-that) と区別される技能知 (Knowing-how) を「非主観的な行為の知」とも呼び、それが、自ら体験することではしか獲得することのできないような直接的で個人的な知なのではないと強調している (門脇二〇一〇a、一二八)。たとえば、他者から「何をしているのか」、「何を見ているのか」、あるいは「なぜそうしているのか」などと問われ、行為者が「黒板の字をノートに書き写している」、「黒板を見ている」、あるいは「書かないと忘れてしまうからだ」などと答えるということによって初めて、非主観的な行為の知はそれとして我々に現れてくる、つまり、主観化される。(門脇はこれを、行為の知の完成とも呼ぶだろう。) その意味で、非主観的な行為の知は「問いに答えることによってのみそれとして明確になってくるような知」(同) であり、「コミュニケーションの場で問題となるもの」(同) なのである。

このように、非主観的な行為の知がコミュニケーションにおいてのみ獲得されるものであり、しかもそれが必然的にこの知の主観化を——すなわち、技能知の命題知化を——伴うとするなら、「正当化された真なる信念(命題的態度)」としての「知識」を含めた人間の知の有り様全体を、個人の知覚ではなくコミュニケーションーションという次元から捉え直していく作業が必要となるだろうし、それはワイトゲンシュタインやデヴィッドソンが辿る道筋と共通するものだろう。ただし門脇は、幾つかの簡潔な記述(門脇二〇〇七b、二一一、等)を除いては、この方向性をこれ以上正面から取り上げてはいない。むしろ彼は、「問いに答えることによってのみそれとして明確になってくるような知、にもかかわらず、そのように答えることを介して言語化されることを待望し、その答えの十分な根拠となっているような分節可能な知」(門脇二〇一〇a、一二八)、すなわち、「言語による主観化を通して明らかにされるべくざわめき立っている知」(一二九)とい

うものそれ自体を輪郭付けるといふ方向性に傾いている。それはおそらく、「了解 (Verstehen)」という、ハイデガーの極めて難解な術語の内実を説明しようという企図によるものだろう。

門脇が言うように、「了解」という概念ほど、『存在と時間』の読者を悩ませるものはない(二二四)。「了解」は行為(および配視、目的・用途の主題化)においてのみ表現される——解釈される——ものであるが(二二四、注一七)、行為(その他)それ自体ではない。門脇はこの晦渋な術語を、非主題的な行為の知の有り様という観点から捉えようと試みている。しかしそのためには、この知の内実そのものを明確にしなければならぬ。とりわけ、非主題的な行為の知と主題的な知(命題知)との本質的な区別を示し、かつ、両者が本質的なかたちで連結していることを示す必要がある。(前述の「知覚経験を概念的思考と区別し、かつ、連結させる」という課題は、門脇にとっては、この大枠の課題のひとつのヴァリエーションであったと言えるだろう。)

この点に関して門脇は、「分節化 (Artikulation)」という、ハイデガーのもうひとつの術語に注目し、「行為とはハイデガーにとって、不確定ではあるが分節化されている行為の方向づけ(可能性)が、状況にそのつど応じて、ある個別の、詳細を備えた行為へと自らを完成させていくこと」(門脇、二〇一〇d、一七五)だと説明している。また、表現(解釈)は分節化の能力としての概念的な能力を前提にしているが、命題と推論の一部となるという意味での概念化とは異なる、とも説明している(門脇、二〇一〇c、七六)。しかし、「不確定ではあるが分節化されている」とはどういうことか。分節化と概念化はどのように異なり、どのように連結するのか。分節化の能力は、たとえば原概念の運用能力とどう違うのか。彼自身が認めているように(同)、この探究は道半ばである。

門脇先生のハイデガー解釈はどこに行き着いただろう。それは結局、コミュニケーションという次元や、信念の正当化(不当化)の可能性というものと、どのように結びついただろうか。先生のさらなる議論の展

開を見ることも、先生に問いをぶつけることも、もうできない。

註

* 本稿は、平成二十二年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。なお、草稿段階で、池田喬、文景楠、吉田恵吾の各氏から有益な助言を頂いた。記して感謝申し上げたい。

(1) 本稿内の引用文中の傍注は、「※強調は引用者」という但し書きが無い限り、原文においてイタリック等によって強調されている部分を表している。また、引用に際しては、邦訳のあるものについてはそれを参考にしており、適宜改変している箇所がある。訳者の方々には御礼とお詫びを申し添えさせていただく。

(2) もっとも、ドレイファスのこの批判は、マクダウエルへのものとしては誤りである。なぜならマクダウエルはむしろ、最小限度の経験主義を保存する方を志向しているからである。たとえば彼は次のように述べている。「経験主義は、その陳腐でない意味においては、思考が空虚とならないのはなぜかを理解可能たらしめる条件を捉えている」(McDowell 2009a, 125)。マクダウエルの経験主義への傾斜については、次の注も参照されたい。

(3) ただしマクダウエルは、この次元の主張から踏み出して、経験主義的な主張を行っているケースも見られる。たとえば彼は、「客観的世界についての命題を受け入れることへの招き (invitation)」として、「印象 (impression)」という経験内容が存在することを積極的に認めている (McDowell 2002, 279)。荒畑靖宏はこの点を突き、「マクダウエルが『心と世界』とそれ以降にさまざまな角度から説明しようとしている『経験』概念から、認識的媒介者という亡霊を祓うことは難しいであろう」(荒畑二〇〇八、三四)と指摘している。(4) 門脇もドレイファスの議論の方向性を次のように批判している。「倫理的なものにもつながっていく人間の行為の問いに、彼〔ドレイファス〕は生物行動学的な答えしか提供していない……。表象としての行為の知を遮断し、しかもそれ以上行為の知を問わないとすれば、バスケットボールのプレーヤーの目的的行為は、アフリカの大地で獲物を追っていく動物たちの目的的行為とさして違わないことになるのではないか」(門脇二〇一〇b、三六)。

(5) この点に関して、「観察の理論負荷性」テーゼを当のワイトゲンシュタインから引き出したはずのハンソンは、はっきりと当惑の表情を見せている。「見る」という概念のうちには、何ほどかは、『を』として見る」という表現の使用を調べていくことから明らかにされるものがある。ワイトゲンシュタインはそのことを認めたがらないが、その理由は、私にはどうもはつきりしない。『…として見る』ことの論理は、一般的な知覚の状態の何たるかを明らかにしてくるように思われる (Hanson 1958, 19; 邦訳、四一―二)。

(6) この、「知覚経験は不確定な信念であるが、様々なアスペクトを表現可能なものとして内包するがゆえに、確定した命題的なもの(限定された信念)を正当化することができる」という門脇の議論は、野家啓一による以下の批判に答えたものである。「不確定の信

念』が『限定された信念』によって表現されることはよいとしても、『限定された信念』が『不確定の信念』によって正当化されるというのは少々奇妙ではあるまいか。正当化の関係において、正当化するものは、正当化されるものよりも、より確定的でなければならぬからである』(野家二〇〇二、八〇九)。本文ですぐ後に述べるように、本稿の立場は、門脇の回答は野家の批判への反論としては不十分なものであり、かつ、知覚経験を不確定な信念とすること自体に根本的な問題がある、というものである。

(7) 門脇が注記しているように(門脇二〇一〇a、一三八、注一五)、これは、人間の行為をめぐるG・E・M・アンスコム の 要 素 論 点 (Ancombe 1979, 2246) と 共 通 じ つ づ ぬ。

参考文献

- Ancombe, G. E. M. 1979. *Intention*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell. (邦訳『インテンション——実践知の考察』、菅豊彦訳、産業図書、一九八四)
- 荒畑靖宏 二〇〇八、『経験と世界への開け——マクタウエルの『最小限の経験主義』のための存在論的前提』、『成城文藝』二〇五、二五〇—二五七
- Davidson, D. 2001a. A Coherence Theory of Truth and Knowledge. *Subjective, Subjective, Objective*, 137–57. Oxford: Clarendon Press. (First published in *Kant oder Hegel?*, edited by D. Heinrich, Stuttgart: Klett-Cotta, 1983.) (邦訳「真理と知識の整合説」、『主観的・間主観的・客観的』、清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦訳、春秋社、二〇〇七、二二八—二五二)
- . 2001b. *The Second Person, Subjective, Intersubjective, Objective*, 107–21. (First published in *Midwest Studies in Philosophy*, 17, 1992.) (邦訳「第二人称」、一七五—一九八)
- . 2001c. *The Emergence of Thought, Subjective, Intersubjective, Objective*, 123–34. (First published in *Die Erfindung des Universums? Neue Überlegungen zur phänomenologischen Kosmologie*, edited by W. G. Salzer, P. Eischenhardt, D. Kurth, and R. E. Zimmermann, Frankfurt am Main: Insel Verlag, 1997.) (邦訳「思考の出現」、一九九—二一五)
- Dreyfus, H. L. 2006. Overcoming the Myth of the Menial. *Topoi* 25 (1–2): 43–9. (邦訳「心的作用の神話の克服」、『思想』、一〇一—一〇七、蟹池陽一訳、岩波書店、二〇〇八、三四—五九)
- Evans, G. 1982. *The Varieties of Referent*. Oxford: Oxford University Press.
- Heck, R. 2000. Nonsensical Content and the 'Space of Reasons'. *Philosophical Review* 109 (4): 483–523.
- Hanson, N. R. 1958. *Patterns of Discovery*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳『科学的発見のパターン』、村上陽一郎訳、講談社学術文庫、一九八六)
- 門脇俊介、二〇〇四、『フッサール——心は世界にどうつながっているのか』、日本放送出版協会
- 、二〇〇七a、『ニーチェの『囀り』に抗して』、『現代哲学の戦略——反自然主義のもう一つ別の可能性』、岩波書店、一五五—八

- 六(初出、『思想』九四八、岩波書店、二〇〇三)
- 、『二〇〇七b』「知覚経験の規範性」、『現代哲学の戦略』、一八七～二二五(初出、『哲学雑誌』、二一〇(七九二)、二〇〇五)
- 、『二〇一〇a』、「知と行為」、『破壊と構築——ハイデガー哲学の二つの位相』、東京大学出版会、一一五～四〇(初出、『哲学雑誌』、七七七、一九九〇)
- 、『二〇一〇b』、「存在の物語、志向性の物語——『存在と時間』の二つの顔」、『破壊と構築』、二三～四〇(初出、『理想』、六五〇、六五～七四)
- 、『二〇一〇c』、「ハイデガーと表象主義」、『破壊と構築』、五七～七八(初出、『ハイデッガー』「存在と時間」の現在、秋富克哉・関口浩、的場哲朗編、南窓社、二〇〇七)
- 、『二〇一〇d』、「行為とは何か」、『破壊と構築』、一六三～八五(初出、『モラル／行為の哲学』〈岩波講座哲学六〉、岩波書店、二〇〇八)
- 河野哲也『二〇〇三』、『エロシカルな心の哲学——ギブソンの実在論から』、勁草書房
- McDowell, J. 1994. *Mind and World*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 2002. Responses. Reading McDowell: On Mind and World, edited by N. H. Smith, 267-305. London and New York: Routledge.
- . 2009a. Scheme-Content Dualism and Empiricism. *The Engaged Intellect: Philosophical Essays*, 115-33. Cambridge, MA: Harvard University Press. (First published in *The Philosophy of Donald Davidson*, edited by L. E. Hahn, Illinois: Open Court, 1999.)
- . 2009b. *Subjective, Intersubjective, Objective. The Engaged Intellect*, 152-9. (First published in *Philosophy and Phenomenological Research* 64, 2003.)
- . 2009c. What Myth? *The Engaged Intellect*, 308-23. (First published in *Inquiry* 50, 2007.) (邦訳『何の神話が問題なのか』、『思想』、二〇一〇、荻原理訳、岩波書店、二〇〇八、六〇～七九)
- . 2009d. Conceptual Capacities in Perception. *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, 127-44. Cambridge, MA: Harvard University Press. (First published in *Keratinizi*, edited by Günter Abel, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2006.)
- Neisser, U. 1976. *Cognition and Reality: Principles and Implications of Cognitive Psychology*. San Francisco: W. H. Freeman. (邦訳『認知の構図』、古崎敬・村瀬曼訳、サイエンス社、一九七八)
- Noë, A. 2004. *Action in Perception*. Cambridge, MA: MIT Press. (邦訳『知覚のなかの行為』、門脇俊介・石原孝二監訳、春秋社、二〇一〇)
- 野家啓一、一九九九、『世界との対面』への見果てぬ夢』、『創文』、四四三、創文社、六～九
- 大森荘蔵、一九九九、『新視覚新論』〈大森荘蔵著作集六〉、岩波書店(初出、『新視覚新論』、東京大学出版会、一九八二)
- Purman, H. 1992. *Renewing Philosophy*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 1999. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York: Columbia University Press. (邦訳『心・身体・世界——三つ擦りの綱／自然な実在論』、野本和幸監訳、法政大学出版局、二〇〇五)

- Sellars, W. 1963. Empiricism and the Philosophy of Mind. *Science, Perception and Reality*, 127–96. London: Routledge & Kegan Paul. (First published in *Minnesota Studies in the Philosophy of Science, Vol. I*, edited by H. Feigl and M. Scriven, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1956.) (邦訳「経験論と心の哲学」『経験論と心の哲学』中才敏郎訳、勁草書房、二〇〇六、一一一～一二五九)
- Wittgenstein, L. 1953. *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell. (邦訳『哲学探究』(ワイトゲンシュタイン全集 八)、藤本隆志訳、大修館書店、一九七六)